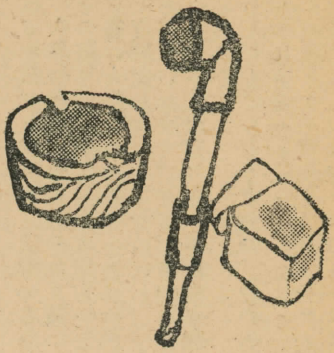

名人雜話

名指導者（三）

木谷蓬吟

彌太夫の稽古机の傍には、いつも學校の出席簿式の一冊が備へてあつた。稽古人の出席缺席を一々丹念に記入されたもので、各氏名と、一ケ月の日附欄が作られ、出席者は筆軸の尻に朱肉をつけて○を捺され、缺席者は無印のまゝで、毎日怠りなく標記されてゐた。差支へあつて一日でも休むと、翌日必ずその理由を聞かれ、兩三日も續いて缺席すると、わざわざ使を出してその樣子を尋ねる。もし師匠の方で臨時休みの時は、規定休日を差繰つて稽古日に直すといふ風で、なかなか嚴重に稽古を督励したものである。

稽古をつける時、自分で語つて聞かす場合は、當の一人だけに聞かすといふよりも、そこに待ち合はせる稽古人全部に聞かすやうに語つた、他人の稽古でも、聞いて取つて參考にせよとの、深切な心遣ひであつた。そして稽古人の耳を、機會ある毎に聞かせやうとの細心な奬励法でもあつた。藝道に熱心な鶴太郎（今の清八）や兵市（故吉兵衛）などは、ほとんど毎夜のやうに詰めかけて、椽側の板の間にキチンと座つて朱を入れてゐたとの話である。それに、稽古の時間に餘裕のある時は、絶えず作意や心持や文章の講釋などを聞かせた、これが甚だ面白くて有益で、どれだけ修行の助けになつたか知れぬと、古老はつくづく師匠の稽古ぶりの徹底したことを感歎したものである。

中村鴈治郎が片岡我當と、道頓堀で吃又の競演をやつた時、二人とも吃又の名人彌太夫に敎へを乞ふた。鴈治郎のその時の直話によると……その時師匠は、吃には突き吃、引き吃などあり、吃の發音法などあり、舞臺の上の吃は寫實でやつては何を言つてゐるか解らなくなるから、うまく虛實の間を狙つて、聞く人の耳へは吃らしく聞こえながら、しかもよくわかるやうに語らねばならぬ、私共の淨瑠璃では、あなた方のやうな表情や身ぶりの助けがありませんから、ただ音聲だけで吃を利かせ、それで文章の意も通さねばならぬから、そこには格別の工夫も要る譯ですが、要するところは舞臺の藝、見物に解らねばなんにもならぬこと故、吃に見えてわかるやうに言へばよいので、この外に秘訣もコツもありません、引き吃でも突き吃でも適材適所に用ひればよろしい、泣く時も普通の人と同じやうに大聲で泣けばよろしからう、吃は表情と身振で澤山でせう……と懇々と敎へられ、これは俳優方には直接必要はないかも知れぬがと、吃の

遣ひ方を五十音によつて一々語つて説明を下された。そしてその芝居を觀て下され、いろいろ感想を洩らされました云々。

文樂座の前の檜下、故津太夫の話によると……よく稽古に行きますと、いつも言はれることですが、「役不足など言ふ暇があれば、その手間で、どうしたらそれが良い役になるか、自分で工夫して良い役場に仕立て直せばよい」と訓へられました。師は語りばえのせぬ悪い役場も工夫しだいで語り甲斐のあるやうな場に生み更へることがお上手でした。それで面白くない役が當ると、皆が堀江へ堀江へと押し掛けたものでした云々。

盲人ながら美聲で上手の名を賣つた駒太夫は言ふた……私はどんな役場の時でもキツと稽古に參りました、最初の程はつまらぬ役でしたが、鄭重に精細に教へられ、そのつまらぬ役場が不思議に語り榮へのする面白い役に活きるのが奇妙でした。或時「八犬傳」の件作内の中を津太夫さんの代役で勤めた時、堀江の彌太夫師匠に稽古を受け、スツカリ味の變つた役場になり、嬉しくて〳〵ウンと馬力をかけ勤めたので大好評を博しました。舞臺の人形遣ひも吃驚し、件作を遣ふてゐられた大名人玉造さんは「ハヽン、これは堀江仕込みぢやナ」と感心され、私もおかげで褒めていたゞきました、これもお稽古のよろしい師匠の七光りのおかげです云々。

文樂の古老重太夫（角太夫）は永年教へを受けてゐたが、彌太夫師の十八番「增補伊賀越船宿北國屋」は雜多な異色の人物が點出される此上もない複雜で、人物描寫のむつかしい皮肉物が、呼び物になりこの場の前あたりからお客が目立つて出入りしたといふ評判の語り物であつたので、これを後日に稽古を乞ふたところ「今その本あれへん」と、ヤンワリと斷られた、これは全く私の聲柄にないからだと、後になつて思ひ當つた。この手で柔かに投げられた連中も往々あつたが、師匠は、これはこの人に向かないと思はれたら決して教へはされなかつた、このけじめのハツキリした點は敬服の外ない云々。

この種の話は山ほどあるが略する、最後に、明治廿一年十二月の因會席上で、路太夫が某師の稽古の不親切を指摘した時、彌太夫は、輕忽な後進者の稽古に對する不心得を諷した頂門の一針を與へた……常に他人の藝を覺えて置く用意がないため、不知の役付きに狼狽し、それを知る人に就てその時の風次第で、彼方此方に稽古に廻るといふ浮氣な氣分で誠意がないから、教へる人に熱も樂しみもない、隨つてお座なり稽古になり、良い藝が出來る筈がない。總じて今の若い人たちは、稽古を極めて簡單に粗略ぞんざいに扱ふ弊がある、昔は名人に稽古を許されることは容易ではなかつた。故吉兵衞氏鬼一の二の切を咲太夫に習ひに行つたが、十一日目にヤツと奥へ通された、咲太夫師は物々しく虎の皮の上に座をしめて言ふ。この役場は故播磨大掾師から心魂を碎いて傳授された一段だと講義の後、慎重に稽古されたとある。昔の稽古はこれ程骨が折れた、今は餘りに先輩の稽古を受けることを輕視するのでないか、師匠の不熱心を云々する前に自分の誠意を反省して見る必要はないか……彌太夫のやうな名指導者なればこそ、この戒告に千鈞の重みがある。

或太夫壺坂を稽古に來て、師匠のは六つかしいと言ふと「どんな淨瑠璃でもほんまにやれば六つかしいものぢや」この一語に指導精神が盡くされてゐる。（完）